【五月の言葉（令和六年）】

自分を偽（いつわ）らずに生きる。

『愚禿（ぐとく）が心（しん）は、内は愚にして外は賢（けん）なり』（愚禿鈔）

親鸞は、自らのことを「愚禿（頭を剃った愚か者）」と称し、「私の内面は愚かで煩悩にまみれているにもかかわらず、外見は賢いかのように振る舞っている」と記しています。いくら外見を取り繕（つくろ）っても、煩悩は絶えず私たちの内面にあり、止まることはありません。それを何とかごまかそうとするのも私たちの愚かさゆえなのです。

親鸞は自らが凡夫（ぼんぶ）であることを自覚し、晩年になってもなお、自分の愚かな心を見つめ続けました。そこには、どんなに愚かであっても阿弥陀様が救ってくださるのだという他力の教えがあったのです。

偽りのない自分の姿を見せるのは勇気がいるでしょう。しかし、身の丈に合わない飾りを一つずつ外していくと、次第に心も軽くなっていくことに気づくはずです。

※凡夫＝煩悩にまどわされている者

（「くり返し読みたい親鸞」参照）